九州産業大学国際文化学部紀要　第7号 173-207（1996）

ジョルジュ・サンド—ギュスターヴ・フロベール往復書簡を読む（I）

持　田　明　子

（1996年9月24日受理）

フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ，1866年12月5—6日〕　水曜日，夜

おお！　ツバメのマレンゴの手紙は何と見事でしょう！　本気でこれは傑作だと思います！　天分の言葉でないものは1語としてありません。私はたびたび大声を上げて笑いました。ありがとうございます，大切な先生，あなたは大変お優しい。

あなたのお仕事のことを少しも私に書いてくださいませんね？　戯曲* はどこまで進んでいますか？

あなたが私の文学的苦悩を少しもお分かりにならないとしても全く驚きません！　私自身，ちっとも理解できないからです。にもかかわらず存在しているのです。しかも，強烈に存在しているのです。書くためにどうすればよいのか，もう分かりません。そして，いつ果てるとも知れぬ手探りの後で，考えていることの100分の1を表現できるだけなのです。あなたの友は直観的な人間ではありません。ちがいます！　全くちがいます！　そういうわけで，まるまるこの2日間，わずか一節をあれこれひねくり回して，まだけりがつかずにいます。こうしたときは泣きたくなります！　私はあなたに哀れみを催させているにちがいありませんね？　私をかわいそうだと思ってください！

われわれの議論の主題について申し上げれば（あなたの青年に関してのことですが），あなたがこの前の手紙で私に書いてくださったことはまさに私の考え方であり，単に実行したばかりでなく，説き勧めたものです。テオ** にたずねてみてください。それでも，誤解のないよう意見を一致させておきましょう。芸術家（彼らは聖職者です）は純潔であることで危険にさらすものは全くありません。その反対です！　だが，「俗物（ブルジョワ）たち」に，それがなんになりましょう？　幾人かが人間らしさを持っていなければなりません。そこを離れない者は幸福でさえあります！

私は（あなたと反対に），理想的な芸術家の性格を題材として，良いものが作り出せるとは思いません。それは怪物でしょう。芸術は例外を描くためのものではありません。それから，私は自分の心の中の何かを書きつけることにどうしようもない嫌悪感を覚えるのです。小説家は，何についてであれ，自分の意見を表明する権利を持たないとさえ，

私は考えています。神様が述べたことが1度としてあったでしょうか，ご自身の意見を？　私を息苦しくし，吐き出したいと思いはするものの，がまんしている多くの事柄があるのは以上の理由からです。実際のところ，それらを言ってなんになりましょう。そこらにいるだれでもがG.フロベール氏より関心を引きます。つまり，その人間の方がより普遍的であり，従って，より典型的であるからです。

しかしながら，自分が愚かさ以下の人間だと感じる日々があります。今，私は金魚鉢を持っています。私を楽しませてくれます。金魚は私の食事の間の話し相手です。これほどつまらぬものに興味を持つのはばかげていますね！

さようなら。夜も更けました。私の頭は煮詰まっています。あなたを優しく抱擁します。

あなたの

Gve.フローブ[1]

（下線，引用者）

（＊『カディオ』）

（＊＊　テオフィル・ゴーチエ）

サンドよりフロベールへ

〔パリ，1866年12月7日〕

作品の中に自分の心を少しも書きこまないですって？　私には全く理解できません，ええ，全く。それ以外のものは投影できないと，この私には思われます。心から精神を切り離すことができるのでしょうか？　それは何か異なったものでしょうか？　感覚まで抑制できるのでしょうか，存在は分裂できるのでしょうか？　結局のところ，作品に自分をすっかりささげられないことは，私には自分の目以外のものを使って涙を流し，自分の脳以外のものを使って考えることと同様に不可能なことに思われます。あなたが言おうとなさったことは何ですか？　お暇なときにお返事をください[2]。

（下線，引用者）

はじめに

性別は言うまでもなく，17歳という年齢差，気質，美意識，政治的信条，生活態度，創作態度，文壇における地位，家族事情，経済的状況，とあらゆるものが，二人の間で根本的に相違しているように見える中，ともに自らを〈老吟遊詩人〉と呼んだジョ

ルジュ・サンドとギュスターヴ・フロベールは，1863年以来，1876年の一方の死の時まで，友愛とお互いへの敬意にみちた書簡を交わし続けた。今日，423通を目にすることができる（表I参照)。自在に内面をほとばしらせたG.サンドの手紙には，老境に達した人間の獲得した精神の穏やかさが一貫して充溢し，一方，右上がりの字体で綴られ，訂正削除が散見されるという，G.フロベールの書簡からは内面の動揺や苦悶，焦燥がにじみ出る。

本稿では，それぞれの日常生活や家族のこと，旅行や出会い，観劇，仕事の計画や進捗状況，お互いの作品に対する賞賛，あるいは眼前の社会的事象に対する見解をしたためた，そして，とりわけ，会えない淋しさ，便りのない不安と同時に，相手が息災でいることへの希いを繰り返し吐露した，1通1通の手紙を通して，2人の芸術観や，この時期執筆された作品の背景のみならず，作家としての彼らが普仏戦争やパリ・コミューンに象徴される暗い時代にどのようにその社会と向いあったかを読み取りたいと思う。すでに述べたように，創作態度も政治的信条も大きく相違する2人の作家の往復書簡ゆえに，一層鮮明にそうしたものが浮かび上がってくると思われるからである。

まず，2人の作家それぞれの年譜から，関連事項を拾い上げておきたい。

1804年7月1日　アマンティーヌ＝オロール＝リュシル・デュパン（後のジョルジュ・サンド)，パリに生まれる。(以下S.と略す)

1821年12月12日　ギュスターヴ・フロベール，ルーアンに生まれる。(以下F.と略す)

1857年4月30日　S.(52歳)，オデオン座（ヴィクトル・セジュール『アンドレ・ジェラール』(*André Gérard*) 上演）で，F.(35歳）に初めて出会う。

1862年11月24日　F.『サランボー』(*Salammbô*) 出版（ミシェル・レヴィ書店)。

11月29日　F.，S.に『サランボー』を献呈。

12月27日　S.，『サランボー』に関する論文執筆（1863年1月11日，脱稿)。

1863年1月27日　S.「『サランボー』についての手紙」(*Lettre sur Salammbô*)（「ラ・プレス」紙)

1864年1月14日，2月1日　F.，S.をパリ，ラシーヌ街の仮寓に訪ねる。

2月29日　S.『ヴィルメール侯爵』(*Le Marquis de Villemer*) 初演（オデオン座)。F.観劇。

9月1日　F.『感情教育』(*L'Education sentimentale*) に着手。

1865年5月8日　S.，マニー亭でF.，サント＝ブーヴと会食

1866年2月12日　S.,〈マニー亭の夕食会〉(*Dîner Magny*) に初めて参加。ちなみに，1866年，S.がこの夕食会に参加したのは，3月12日，3月26日，4月9日，4月23日，5月7日，5月21日，8月13日，11月19日，12月3日，12月17日。

2月19日　サント＝ブーヴの家で，S.，F.，ベルトロ，デュマ・フィス会食

5月2日　サント＝ブーヴの家で，S.，F.，テーヌ，マチルド妃会食

7月1日—8月15日　S.『最後の愛』(*Le Dernier Amour*)（「両世界評論」誌）

8月9日　S.『村のドン・ジュアン』(*Les Don Juan de Village*) 初演（ヴォードヴィル座）。F.観劇。

8月28日—30日　S.，クロワッセのF.邸に滞在。

10月29日　ルイ・ブイエ『アンボワーズの陰謀』(*La Conjuration d'Amboise*) 初演（オデオン座）。F.，S.観劇。

11月3日—10日　S.，クロワッセのF.邸に滞在。

1867年9月17日—18日　S.，ジュリエット・ランベールらとノルマンディー地方への旅行。

9月25日—29日　S.，ノルマンディー地方への旅行

1868年5月5日　S.，パリでF.に会う。

5月24日—26日　S.，クロワッセのF.邸に滞在。

10月3日　S.『カディオ』(*Cadio*) 初演（ポルト＝サン＝マルタン座）。F.観劇。

1869年5月10日　F.，『感情教育』の一部をS.に朗読。

5月16日　F.，『感情教育』脱稿。

5月28日　S.，マニー亭でF.，ナポレオン公，テーヌらと会食。

9月11日　S.『ラ・プティット・ファデット』(*La Petite Fadette*) 初演（オペラ・コミック座）。F.観劇。

11月17日　F.『感情教育』出版。

12月8日　S.，『感情教育』に関する論文執筆。

12月21日　S.「『感情教育』」(*L'Education Sentimentale*)（「ラ・リベルテ」紙）

12月24日—27日　F.，ノアンのS.邸に滞在。

1870年2月25日　S.『もう一方』(*L'Autre*) 初演（オデオン座）

3月19日　F.，『もう一方』観劇。

1871年3月1日—4月1日　S.『戦時下のある旅人の日記』(*Le Journal d'un voyageur pendant la guerre*)（「両世界評論」誌）

5月1日—6月1日　S.『フランシア』(*Francia*)（「両世界評論」誌）

10月3日　S.『ある友への返事』(*Réponse à un ami*)（「ル・タン」紙）

1872年3月7日—4月20日　S.『ナノン』(*Nanon*)（「ル・タン」紙）

4月6日　F.の母の死

6月12日　S., F.とパリで会食

7月1日　F.『聖アントワーヌの誘惑』(*La Tentation de Saint Antoine*) 脱稿。

1873年4月12日—19日　F., ノアンに滞在。

4月14日　F.,『聖アントワーヌの誘惑』を朗読。

4月16日—19日　トゥルゲーネフ, ノアンに滞在。

1875年2月—3月—4月　F., 病気（風邪, 疝痛, うつ病）

2月末　S., 右腕の激しいリウマチ

1876年2月17日　F.『聖ジュリアン伝』(*La Légende de Saint Julien l'Hospitalier*) 脱稿。『純な心』(*Un cœur simple*) に着手。

3月7日　S.『ヴィクトリーヌの結婚』(*Le Mariage de Victorine*) 再演（コメディー・フランセーズ）。F.観劇。

6月8日　S., ノアンで死去（71歳）

6月10日　ノアンでの埋葬にF., ナポレオン公, ルナンらと参列。

1880年5月8日　F., クロワッセで死去（58歳）。

I. 1863年

1850年以来, G.サンドの傍にあったアレクサンドル・マンソーは1862年の備忘録 Agenda に,《フロベールがマダムに彼のカルタゴの小説を送ってくる。》(11月29日),《マダムはこの本に満足している。》[3] (12月26日) と記した。〈カルタゴの小説〉は言うまでもなく『サランボー』であり, 批評家たちから攻撃を受けたこの作品を弁護するために, G.サンドは賞賛の記事を執筆し, 1863年1月27日の「ラ・プレス」紙に発表した。賛辞に喜びもし, 満足もしたフロベールは, 出版者ミシェル・レヴィに女流作家の住所を問い合わせ[4], 礼状を急ぎしたためた。G.サンドがフロベールにあてた最初の手紙はそれに答えたものである。

〔手紙1〕 サンドよりフロベールへ

ノアン，(18) 63年1月28日

親しい弟へ

私が義務を果たしたことに感謝なさるには及びません。批評家がその義務を果たすときには，私は口をつぐんでいるつもりです。と言いますのも，判断を下すより，創作する方が好きだからです。けれども，『サランボー』を実際に読む前に，『サランボー』について目にした文章はことごとく不当であったり，不十分なものでした。口をつぐんでいるのは臆病か怠惰であると私は考えました。両者は大変似通ったものですから。あなたの敵を私の敵に加えることになるとしても，かまいはしません——多少の差があるだけのこと……

「斧の狭路」についてのかなり子供じみた批評を許して頂かなければなりません。私がそのままにしておきましたのは，徹頭徹尾の称賛でない方が私の気持ちの真摯さを増すからに他なりません。

私たちはお互いのことをほとんど知りません。時間がおありのとき，会いにいらしてください。遠くはありません。いつも家におります。とは言え，私は老齢です。私が子供に返ってしまうまでお待ちになりませんように。

ところで，謎めいた状況から私を抜け出させてください。9月に心ひかれる押し葉を受け取りましたが，封筒には差出人の名がありませんでした。今日になって，あなたの筆跡のように私には思われます。けれども，それは信じられないことです。私が植物学にひどく熱心に取り組んでいることをあなたがどこでお知りになれましょう？

あなたが謝意を表してくださる言葉で私の心をとらえましたのは，友情が感じられる語調です。そして，それを受ける権利が私にはあると確信しています。

G. サンド[5]。

〔手紙2〕 フロベールよりサンドへ

（パリ，1863年1月31日）

拝啓

あなたが義務と呼ばれるものを果たされたことに感謝しているのではありません。お心の優しさに感動いたしましたし，共鳴して頂けたことを誇らしく思いました。それだけのことです。

届きましたばかりのお手紙はあなたの論文を補い，それを凌ぐものです。あなたを非常に素直に愛しています，という以外に，何と申し上げてよいか分かりません。

オーカント氏より，あなたに『オピニォン・ナショナル』誌をお送りするよう依頼がありました。この手紙と同時にお手許に届くことでしょう。

9月に，小さな花を封筒に入れてお送りしたのは私では全くありません。けれども，不思議なことに，同じ頃，私の許にも1枚の木の葉が同様に届きました。

あなたのお心のこもったご招待につきましては，真にノルマンディー地方の人間らしく，お受けするともお受けできないとも，お返事いたしません。多分，いつか，この夏に，突然，お訪ねすることでしょう。あなたにお目にかかって，語り合えることを切望しています。

愛をこめて。　　敬具

Gve. フロベール。

タンプル大通り42番地，あるいは

ルーアンの近くクロワッセ。

追伸

私がよく何か月もたった1人で過ごす田舎の私の書斎の壁に掛けておけるよう，あなたの肖像を頂けましたら，大変うれしいのですが。このお願いはぶしつけでしょうか。そうでなければ，あらかじめ心よりお礼申し上げます。もう一度繰り返します他の感謝の気持ちとともにお受け取りください[6]。

II．1864年

G. サンドの戯曲『ヴィルメール侯爵』がパリのオデオン座で2月29日，初演され，この劇場始まって以来の大成功を収めた。フロベールはサンドとともにナポレオン公ジェロームの桟敷席でこの初演に立ち合い，《女性のように涙を流した。[7]》

［手紙3］　サンドよりフロベールへ

パリ，（18）64年3月5日。

親愛なるフロベール

あなたがテーヌ氏の立派な本* を私に貸してくださったのか，それとも，くださったのか分かりません。確信が持てませんので，あなたに返送いたします。ここでは一部し

か目を通す時間がありませんでした。ノアンでは，ビュロのために大急ぎでペンを走らせる時間しかありません。でも，2か月後に戻って来たときに，非常に格調の高いこの卓越した書物をもう一度，お願いすることになりましょう。あなたにお別れの挨拶をしなかったことが悔やまれます。けれども，直きに戻って来ますので，あなたが私のことをお忘れになっていないことを，そして，あなたのペンになるものを何か読ませていただけることを期待しています。『ヴィルメール』の初演では，あなたは私に対して大層お優しく，好意を見せてくださいましたから，私はあなたのすばらしい才能を賛美するばかりでなく，あなたを心から愛しています。

ジョルジュ・サンド[8]。

（＊ G. リュバン氏によれば，『イギリス文学史』(1864, 4 vol.)）

1864年に書かれた書簡はこの1通だけであり，2人の作家の間に手紙のやりとりで真の友情が育まれるのは1866年からである。

Ⅲ. 1866年

表Ⅰにあるように，サンドからは28通，フロベールからは23通という豊饒な書簡が交わされる。

1862年11月以来，サント＝ブーヴとガヴァルニの提唱で，文壇や科学界の著名人が集まって開かれていた，名高い〈マニー亭の夕食会〉(月曜日開催）に，以前から参加を求められていたサンドもこの年の2月から出席するようになり，2人の出会う機会が増えたことも，友情の進展に拍車をかけたことは想像に難くない。2月12日のサンドの備忘録に次の印象を読むことができる。《マニー亭で仲間たちと最初の夕食会。これ以上望めないほどの歓迎を受ける。大科学者のベルトロを除いて，皆，非常に才気があった。ゴーチエはいつもながら，輝かしく，逆説好き。サン＝ヴィクトルは魅力的で気品がある。フロベールは情熱的で，私に対してほかの人々より好意的である。なぜ？ 私にはまだわからない。ゴンクール兄弟は厚顔にすぎる。機知に富んではいるが，大おじさんたちにたてつきすぎる弟の方がとりわけそうだ。誰に劣らず才気があり，最も口達者なのはやはり，ブーヴおじさんと呼ばれる彼……1人あたり10フラン。夕食はぱっとしない。皆大いにタバコをふかし，声をかぎりに叫ぶ。そして帰りたいときに帰って行く。(……)[9]》

〔手紙4〕　フロベールよりサンドへ

〔パリ，1866年3月―5月〕日曜日，朝

明日，月曜日はマニー亭の日です，大切な先生。もちろん，私は出席します。今からその時まで，心をこめて。

Gve. フロベール[10]

〔手紙5〕　サンドよりフロベールへ

パレゾー（1866年）5月14日

（…）

大切な友，間もなく刊行される小説* をあなたに献呈したいと思っていることをお伝えします。けれども，このことに関しては各人各様の考えがありますから――グラールも言うことでしょう――第1頁の冒頭に《わが友ギュスターヴ・フロベールへ》とだけ記すことをお許し頂けるかどうか是非とも知りたいのです。私の小説を愛する人の庇護の下に置くのは私の習慣なのです。この前の小説はフロマンタンに献じました。（…）

私の小説は終わりました。あなたの方はいかがですか？（…）[11]

（＊『最後の愛』）

〔手紙6〕　フロベールよりサンドへ

（パリ，1866年5月15日）火曜日，朝

よろしいですとも！　喜んで！　感謝し，心打たれております，大切な先生！

パレゾー訪問を8月に延ばさなくてはなりません。来週の火曜日，田舎に帰るからです。年老いた母が大声で私を呼び求めるのです。来週の月曜日，あなたにお別れ（アデュ）を，いえ，ではまた（オ・ルヴォワール），と申し上げましょう。

『シルヴェストル氏』(*Monsieur Sylvestre*)* を一気に読み，（私の習慣で）余白に注をちりばめました。月曜日，時間があれば，お宅にこの本をお持ちして，マニー亭に出かける前にこれについて語り合いましょう。

あなたが私のことを愛してくださるのは全く正しいことです。まさしく私の方でもあなたを愛しているのですから。

あなたの両手を握り，両頬に口づけします。　　敬具

あなたの

Gve. フロベール[12]

（＊　G. サンドの小説（1865年））

〔手紙7〕　サンドよりフロベールへ

パレゾー（1866年5月）16日，水曜日

では，私の親しい友，あなたが行ってしまい，2週間後には私もベリーに2，3か月の予定で帰りますから，明日，木曜日，時間を見つけてこちらに来られるよう努力をしてください。大切で，魅力的なマルグリット・テュイリエ夫人と一緒に夕食を取りましょう。夫人も発たれます。ですから私とシルヴェストルの庵（いおり）を見にいらしてください。パリのソー駅を1時にお発ちになれば2時に，5時に乗れば6時に私の家に着くことができます。夜，9時か10時に私の犬たちとお帰りになればよろしいでしょう。

本をお持ちください。あなたの頭に浮かんだ批評を残らず書き入れてください。それは私にとって大変有益なことでしょう。バルザックと私がやっていたように，これをお互いのためにやるべきでしょう。お互いが自分を変えるということにはなりません。それどころか，人は自己に一層固執するものです。けれども，自己に固執することで，その不足を補い，より巧く説明し，完全に発達させるのです。自分自身であることがなんらかの価値を持つ第一条件である文学においてさえ，友情が有用であるのはこのためです。

あなたがお出でになれなければ，大層残念に思いますが，その時は，月曜日の夕食前，あなたに会えることを大いに期待しています。

(…)

さようなら。献辞を友情から許してくださってありがとうございます。

G. サンド[13]

〔手紙8〕　フロベールよりサンドへ

（パリ，1866年5月18日あるいは19日）

大切な先生

月曜日，私をお待ちにならないでください。その日はヴェルサイユに行かなくてはなりません！　けれども，マニー亭にはいます。

愛をこめて

Gve. フロベール[14]

この年の夏の終り，G.サンドは初めてクロワッセのフロベール邸に滞在する。

ルーアンまでの旅について細々（こまごま）と指示するフローベルの言葉に，〈大切な先生〉を迎える，彼の弾む心を読み取ることは容易である。

〔手紙9〕　サンドよりフロベールへ

パリ，（1866年8月22日）水曜日，夜

私の良き友人

土曜日の夕方，サン＝ヴァレリーにアレクサンドル* を訪ねます。日曜日と月曜日をそこで過ごします。火曜日にルーアンに戻り，あなたにお目にかかりに行くつもりです。どうすればいいのか教えてください。よろしければ日中をあなたと過ごし，お宅でお邪魔になるようでしたら，ルーアンに戻って泊まりましょう。そして水曜日の朝か夕方，パリに向けて発つ予定です。あなたのお返事が郵便では土曜日の4時までに私の許に届かないとお考えでしたら，すぐに，電報でひと言，お返事をください。

私はひどい風邪を引いていますが，回復すると思います。悪化するようでしたら，出かけることができないと電報であなたにお知らせしましょう。でも，期待しています。もう良くなっていますから。

心をこめて

G.サンド(15)

（＊　アレクサンドル・デュマ・フィス）

〔手紙10〕　フロベールよりサンドへ

ルーアンの近くクロワッセ

金曜日（1866年8月24日）

大切な先生

おやりになるべきことは以下の通りです。サン＝ヴァレリーに到着され次第，サン＝ヴァレリーからモトヴィルまで，おんぼろ車の座席を予約なさってください。そうしなければ，あなたの出発が遅くなる幸運に見舞われることがあります。

9時15分前にサン＝ヴァレリーを発てば，1時にルーアンに着きます。ルーアンで車の扉をお開けになれば，そこに私の姿があります。おやりになることはもう何もありません。朝，サン＝ヴァレリーをお発ちにならなければ，夕方4時の出発しかありません。

あなたの寝室があなたをお待ちしていることを伝える電報をお受け取りになられたことでしょう。ですから，ここにお泊まりください。

あなたがお着きになる正確な時刻を私に知らせるお返事をサン＝ヴァレリーからどうぞお送りください。

敬具

Gve. フロベール[16]

〔手紙11〕 サンドよりフロベールへ

サン＝ヴァレリー，月曜日，午前1時

（1866年8月26日—27日）

親しい友

火曜日，1時にルーアンに着きます。しかるべくやるつもりです。私がまだ知らないルーアンを見させてくださるか，あなたにもしお時間があれば，案内してください。

心をこめて。母上が私に書いてくださったご親切な手紙にどれほど心を打たれ，感謝しているか，どうぞお伝えください。

G. サンド[17]

クロワッセ滞在はG. サンドにとりきわめて心地よいものであった。覚え書に日々記された簡潔な言葉がその感激を十分に伝える。たとえば，8月28日の言葉。《(…) クロワッセに3時半，到着。フロベールの母上は魅力的な老婦人。場所は静かで，家は快適で美しく，よく配置されている。世話が行き届き，清潔さ，水，予備のもの，望み得る全てがある。私は何不自由なく暮らしている。フロベールが見事な『聖アントワーヌの誘惑』を朗読。彼の書斎で朝の2時まで語りあう。[18]》

フロベールの方も女流作家から好印象を受け，サンドが出発した翌日，マチルド妃に，《(ジョルジュ・サンドは) いつものように非常に率直で，青踏婦人的なところはみじんもありませんでした。[19]》と書き送る。

帰京したサンドは直ちに感謝の気持ちと，共に過ごした日々の喜びを率直な言葉で伝え，フロベールもまた，感動をしたためる。重ねられる書簡から，深まっていく友愛がにじみ出る。

〔手紙12〕　サンドよりフロベールへ

パリ，金曜日（1866年８月31日）

まず何よりも，優しい母上と魅力的な姪ごさんを私の代りに抱擁してください。あなた方の平穏な暮らしの中で私が受けたもてなしに深く心を打たれています。私のような放浪動物はお宅では異例であり，気詰まりに感じられたことでしょうに。迷惑に思われず，まるで家族の一員のように私を迎えてくださいました。この非常に厚い礼儀が心からのものであることが分かりました。大層，優しい友人たちにどうぞよろしくお伝えください。

それから，あなた，あなたは立派な大人ですが，純朴で優しい少年ですね。心から愛しています。私の頭はルーアンや大建造物，風変わりな家々で一杯ですよ。あなたと一緒に見たことでこうした全てのものが私を二重に感動させています。それにしても，あなたの家，庭，砦はまるで夢のようです。まだそこにいるような気がします。

昨日，橋を渡ったとき，パリがひどく小さく思われました。また出かけたくなっています。あなた方や，あなた方が日々，目にしておられる風景を十分に見られませんでしたから。でも，私を呼び，威嚇している子供たちの許に駆けつけなければなりません。

心をこめて。皆様に感謝いたします。

G. サンド

昨日，帰宅して，クチュールに出会いました。彼の制作した私の肖像が最良であるとあなたがおっしゃっていたことを伝えました。彼は満足していました。あなたにお送りするために良くできた版画を探しましょう。

ユリノキから３枚の葉を摘むのを忘れました。手紙に同封して送っていただかなければなりません。何か神秘的な感じがしますから[20]。

〔手紙13〕　フロベールよりサンドへ

（クロワッセ）土曜日，11時（1866年９月１日）

今朝のあなたのお手紙は何と思いやりにみちた，優しさでしょう，大切な先生。それは私にとっては，一昨日，あなたが列車の中から私に投げてくださった別れのまなざしにつづくものです。

あなたがお発ちになってからというもの，あなたのことばかり話しています。誰もかれもがあなたのことをすっかり気に入ったからです。仕方がないではありませんか！あなたのお人柄の抗し難い，そして無意志の魅力に我慢できないのですよ。

もう一度，お見えにならなければなりません，そうですね？　それに，もっと長い間。

あなたはレースのショールをお忘れになりました。パリをもう離れておられて，お受

け取りになれず，ショールが門番のところで行方不明になる心配さえなければ，すでに鉄道で旅をしているところですが。ひと言，お返事をください，すぐにあなたの許にお送りいたします。

肖像にあらかじめお礼を申しあげます。

心をこめて，

あなたの

Gve. フロベール

私に見出せる限りの優しい言葉をあなたにお送りするよう皆から言い付かっていることは申し上げるまでもありません[21]。

〔手紙14〕 サンドよりフロベールへ

（パリ）日曜日，夜（1866年9月2日）

レースのショールを送り返してください。私の忠実な門番が私の居る所に送ってくれましょう。もっとも，どこに行くかまだ分かりません。(…)

あなたが私に書いてくださる優しい大切な手紙に口づけします。ユリノキの3枚の葉を忘れないでください。

ノアンの劇場用に書いた幻想的な戯曲『クリスマスの夜』をオデオン座で上演するよう求められましたが，私は望んでいません。あまりに取るに足らないものですからね。けれども，彼らがこの構想を持っているのですから，どうしてあなたの夢幻劇* を提案してみないことがありましょう？　私がお話しましょうか？　このジャンルのものとしてそれは真実の芝居だと私は思います。シリとデュクネルの理事会は文学的であるだけでなく，舞台装置に凝っていてトリックが仕掛けられているようなものを作りたいのです。私がここに戻ってから，こうしたことについて一緒に話し合いましょう。私にまだ手紙を書いてくださる時間がおありですね。3日以内に発つことはありませんから。

G. サンド

皆様に愛をこめて。

忘れていました！　レヴィ** があなたに私の全集をお送りすることを約束しました。膨大です。隅の棚の上にうっちゃておいてください，そしてお望みのときに，取り出してくだされば十分です[22]。

（*　ルイ・ブイエらとの共作『心の城』）

（**　ミシェル・レヴィ）

〔手紙15〕　フロベールよりサンドへ

クロワッセ，水曜日（1866年9月12日）

大切な先生

ご本の箱が届きました。ご本は今，私の前に並んでいます。この贈り物に厚くお礼申し上げます。私たちは，これまであなたを賞讃し，愛しておりましたが，今や，あなたを熱烈に崇拝することをお望みというわけですね！

今，どこにいらっしゃるのですか？　私は独りきりです。暖炉には火が燃え，土砂降りの雨が間断なく続いています。私は一人前の男のように仕事をしています。あなたに思いを馳せています。　心をこめて

Gve. フロベール(23)

〔手紙16〕　サンドよりフロベールへ

ノアン，(18) 66年9月21日

子供たちと一緒に12日間，駆け回ってきました。そして，帰宅するとあなたから2通の手紙が届いていました。元気で可愛らしいオロールを目にした喜びに加えて，このことが私をすっかり幸せな気持ちにしてくれました。

ところで，私のベネディクト会修道士さん，あなたは，あなたの素晴らしい田舎の一軒家(シャルトルーズ)*に独りきりでいて，仕事をし，全く遊びに行かないのですか？　外出しすぎたのでこうなるのですね！　流砂や砂漠やアスファルト質の湖，危険や疲労が必要でした！　それでいながら，生活の細部が隈なく観察され，大家の筆で描き出されている『ボヴァリー』のような小説の作者でもあります。スフィンクスとキマイラの闘いも生み出すのは何と大した身体でしょう！　あなたはきわめて例外的で，神秘的な存在，それでいて，まるで羊のように穏やかな存在ですね。私はあなたにお尋ねしたくてなりませんでしたが，あなたへの大きすぎる尊敬の気持ちが邪魔をしました。私自身の悲惨をいじることしか私にはできませんから。偉大な精神の持ち主が創造できる状態になるために耐えたにちがいない悲惨は手荒くであれ，そっとであれ，触れてはならない神聖なものに私には思われます。サント＝ブーヴはあなたを愛していますが，あなたがひどい放蕩者だと言い張っています。でも，おそらく彼は少しばかり汚れた目で見ているのですよ。ニガクサは汚れた黄色をしていると主張するあの博学の植物学者** のように。観察があまりにも誤っていますから，私は彼の本の欄外に，「汚れた目をしているのはあなたです。」と書きこまずにはいられませんでした。優れた知性の持ち主は強い好奇心を持ちうると私は推測しています。私にはそれはありませんでした，熱意がないために，私の精神を不完全なままにしておく方が好きでした。それは私にかかわることです。だれでも大型の帆船に乗るのも，釣り舟に乗るのも自由です。芸術家はいかなるものも押しと

どめるべきでなく，右側を歩こうと左側を歩こうとどちらでもよく，その目的が全てを神聖化する探検家のようなものです。少しばかりの経験の後で，芸術家は自分の精神の健康条件を知ります。私はあなたの精神が恵まれた状態にあると思います。あなたが仕事をすること，そして，雨にもかかわらず1人でいることに喜びを感じておられるからです。至る所で土砂降りだったのに，私たちはブルターニュ地方で何回かにわか雨に遭った以外は陽光に恵まれたのですよ。大洋の浜辺では烈風が吹き，高波が見事でした。砂原の植物学が私を夢中にさせていますし，モーリス夫婦は貝殻に熱中していますから，私たちはどんなことにも陽気に耐えました。ほかのことに関しては，ブルターニュはとてつもないぶらんこです。私たちはドルメンやメンヒルに消化不良を起こしました。祭りに出くわし，廃止されたと言われながら，老人たちが今なお，身につけている衣裳をことごとく目にしました。ところで，平織地の半ズボン，長髪，脇にポケットのついた上着，半ば酔っぱらいで，半ば信心深げな，この地方の時代遅れの男たちは見苦しいですね。ケルト人の名残は考古学者には異論の余地なく興味深いものですが，芸術家にとっては何の価値もありません。縁どりも構成も悪く，カルナックやエルデヴァンは特徴が全くありません。ひと言で言って，ブルターニュに私の遺骨が眠るようなことはありませんよ。(…) 司祭が権力を振るっている地，カトリックの蛮行が旧世界の建造物を破壊し尽くし，将来のシラミをまき散らして通り抜けた地には何もありません。

夢幻劇のことで，あなたはわれわれと言われます。あなたが誰と一緒に書かれたのか私には分かりませんが，それは現在のオデオン座にふさわしいにちがいないという思いは変わりません。私がその作品を知っていれば，自分のためには決してできないこと，つまり，劇場支配人たちをけしかけることをあなたのためにうまくやるのですが。あなたが書くものは，太っちょのデュメーヌが理解するにはきっと独創的すぎるのでしょう。あなたの許に写しを用意しておいてください。あなたに朗読していただくために，あなたと1日を過ごしにパリから出かけましょう。パレゾーのすぐ近くですから，クロワッセは！　それに，私は今，ゆっくり仕事をしていますから，あなたの大きな河が流れるのを眺めたり，崖の上にある，あなたの静かな果樹園で夢想にふけっていたいのですよ。

おしゃべりをしてしまいました。あなたは仕事の最中だというのに。石ばかりを見物し、12日間，ペンが目に入ることさえなかった人間の例外的な節度の無さを許していただかなくてはなりません。あなたは，哀れな自分のことを完全に忘れていた私が，その忘却から覚めて，最初に訪ねたこの世の人間なのです。人生を享受してください！　これこそが私の祈りであり，祝福です。

心をこめて。

G. サンド[24]

（＊　シャルトルーズ Chartreuse は，カルトゥジオ会修道院をも意味する）

（＊＊　ジャン＝アルフォンス・ボワ＝デュヴァル（リュバン注））

〔手紙17〕　フロベールよりサンドへ

（クロワッセ）土曜日，夜（1866年9月22日）

私が《神秘的な存在》ですって！　大切な先生，とんでもありません！　それどころか，私は吐き気を催させるほど陳腐な人間だと思います。そして，しばしば皮膚の下にある俗物にひどく嫌悪感を抱いているのです。ここだけの話ですが，サント＝ブーヴが何と言おうと，彼は私のことを全く知りません。

（あなたの孫娘さんの微笑みにかけて）私は自分より《悪徳》でないような人間はほとんど知らない，と誓ってもいい位です。私は多くのことを夢見ましたが，実現したのはごくわずかです。うわべだけしか見ない観察者たちを欺くのは，私の感情と思想の間にある不一致ですよ。こっけいだという感覚が自堕落の途中で私を引き留めたのです。臆面のなさは純潔と紙一重だと私は断言します。このことに関しては，今度お目にかかるとき，（お望みであれば），たっぷり語り合いましょう。

私が提案する計画は次のとうりです。私の家はこれから1か月の間，客が多く，不都合です。けれども10月末か11月始め頃（ブイエの戯曲が上演された後），私と一緒にここに戻ってきていただきたいのです。あなたがおっしゃるように1日ではなく，少なくとも1週間の予定でです！　合意いただけますね？《小円卓と書くのに必要なものがすべて揃った》あなたの寝室があります。私の母も含めて，3人だけです。

夢幻劇のことではご援助を申し出ていただき，ありがとうございます。大声で朗読してお聞かせいたします（これはブイエとの合作です）。とはいえ，出来の悪い，些細なものと思いますので，いくらかの金を稼ぎたいという欲望と，くだらない作品をひけらかす恥ずかしさの間で引き裂かれています。

あなたがブルターニュ地方に対して少し厳しすぎるように私には思われます。気難しそうな動物，愛想のよくない豚と私の目に映じた，この地方の人間に対してではありません。ケルト考古学に関して，私は1858年，『ラルティスト』誌に揺れる石についてかなり上出来のほら話を掲載しました。もっとも，その号は手許にありません。何月号だったかさえ思い出せません。

『わが生涯の歴史』10巻を一気に読みました，ほぼ3分の2は知っていたのですが，断片的に読んだに過ぎませんでした。最も感動したのは修道院の生活のくだりです。全篇を通じて，あなたにお伝えしたい多くの考察があります。そしてそれらは私に戻ってくるものです。

どんな雨が降っているのですか？　ノアンに長い間，滞在なさるのですか？

あなたに何を望めばよいでしょう？　私はあなたに再会できることを望んでいます。それでは近い中に。愛情をこめて，あなたの両手に口づけします。

あなたの

Gve. フロベール

母と私は毎日，あなたのことを話しています。母はあなたとの再会を非常に喜ぶことでしょう[25]。

〔手紙18〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ，土曜日，夜（1866年9月29日）

さて，この美しく，大切な，そして有名なお顔をいただきました。大きな額縁を作らせ，私の部屋の壁に掛けましょう。タレーラン猊下が国王ルイ＝フィリップに述べた言葉，「これはわが家が受けた最大の栄誉でございます」を繰り返すことができるというものです。もっとも，ふさわしい言葉ではありません。われわれの価値はこの2人の好人物よりまさっていますからね。

2つの肖像の中で，私が一層好きなのはクチュールの素描の方です。マルシャルは，あなたの中に《心優しき婦人》しか見ていません。しかし年老いたロマン主義者の私は，もう一方の肖像に，青春の日々，私を大いに夢想に誘った，《作家の顔》を認めます。

あなたはパリに戻っていらっしゃるのですね？　何をなさっておられるのですか？戯曲は進んでいますか？　あなたの友はといえば，今やその家を満たしている子供たち，つまり，姪の息子と娘に茫然としています。2人はロバのように大声で叫び，サルのように飛び跳ねています。私は仕事をするのが大変困難で，静寂と精神集中を大いに必要としています。

10月末頃，こちらに戻って来ていただけることはご了解ずみですね。私たちだけですから，徹底的に語り，少しばかり顔を見合わせる時間がありましょう。

さようなら，大切な先生，深い愛情をこめて

あなたの

Gve. フロベール[26]

〔手紙19〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ，土曜日，夜（1866年9月29日）

2枚の肖像を送ってくださったことから，私はあなたがパリにいらっしゃると思っていました，大切な先生。それで，あなたに書いた手紙はフィヤンティーヌ街* であなたを待っているというわけです。

ドルメンに関する私の記事は探し出すことができませんでした。しかし，ブルターニュ紀行文の全原稿を《未発表作品》の中に収めています。あなたがこちらにいらっしゃったとき，たっぷり話すことにしましょう！　がっかりなさらないでください！

私はあなたのように，人生が始まる感情や，開花したばかりの生活の驚きを感じるこ

とはありません。反対に，私は常に存在していたように思われます！　そして，ファラオにまでさかのぼる思い出を持っているのです。歴史のいろいろな時代に，異なった職業に従事し，多様な境遇にある自分の姿がはっきりと見えます。現在の私自身は消え去ったさまざまな私の個性の結果です。私はナイル河の船頭であり，ポエニ戦争時代のローマでは女衒，次いで，スブラではギリシャの雄弁家で，南京虫にさいなまれました。十字軍では，シリアの海岸でぶどうを食べ過ぎて死にました。私は海賊であり，僧侶であり，軽業師，また，御者でもありました。おそらく，東洋の皇帝でもあったことでしょう？

われわれが自分の真の系図を知ることができれば，多くのことが説明されるでしょう。人間を作り上げる要素は限定されていますから，同じ組合せが繰り返されるにちがいないでしょう？　そういうわけで，「遺伝」は正しい原理ですが，誤って適用されたのです。この言葉についても他の多くの言葉と事情は同じです。各人がその一端だけをとらえますから，理解し合わないのです。正確な用語がない限り，また多種多様な観念を意味するために同一の表現の使用が許されている限り，心理学は未来も，今の状態に，つまり，暗黒と狂気の中にとどまっていることでしょう。範疇（カテゴリー）がまぜこぜになっているときは，さらば「倫理」よ，です！

89年以来**，われわれはたわごとを言っているのだと，あなたは結局のところ，お思いになりませんか？　広く，美しい大道を進む代わりに，小道に逃げこみ，そして今，ぬかるみの中を苦労して歩いている有様です。しばらく，ドルバックに戻ることがおそらく賢明ではないでしょうか？　プルードンを讃美する前に，チュルゴを知っているのであれば？

それにしても，「粋（シック）」，この近代の宗教はどうなるのでしょう？　粋な意見，つまり，（1語さえ信ずることなく）カトリック教義を支持し，奴隷制度に賛成し，オーストリア王家に味方し，王妃アメリーの喪に服し，『地獄のオルフェ』に感嘆の声を上げ，農業共進会に関心を抱き，スポーツの話をし，冷静であることを示し，1815年の条約を悔やむほどに「間抜け」であること，目新しいことはこうしたものだけですよ。

ああ！　あなたは私がアソナンス（同一の強勢母音の反復）を避けながら，諧調に富んだ文章を書こうとして，人生を費やしているために，この世の事柄に対してささやかながらも自分の判断を持っていないとお思いですね。ああ，持っていますとも！　それを口にしないために怒りの余り死にそうですよ。

しかし，もう十分におしゃべりしました。しまいにはあなたをうんざりさせてしまうことでしょう。

ブイエの戯曲は11月初めに上演される予定です。従って，お目にかかれるのは1か月後です。

あなたが私にお送りくださったお子様たちの親切な言葉に対する私の感謝の気持ちをお伝えください。

あなたを非常に強く抱擁いたします，大切な先生，

あなたの

Gve. フロベール[27]

（＊　この時期，フィヤンティーヌ街57番地にサンドの仮寓があった。）
（＊＊　フランス大革命）

G. サンドとフロベールの芸術観，創作態度が大きく相違したことは言うまでもなく周知であるが，往復書簡という「対話」を通して，2人はしばしば〈作家〉として対峙する。作家とその読者の関わり，人物の創造について，きわめて率直に，そして，時に，断固として，自らの信条を語る。次に引用する書簡は，G. サンドがフロベールに対して，初めて明瞭に作家としての自らのスタンスを表明したものであるが，いわば合わせ鏡のように，〈作家フロベール〉をも映し出す。

〔手紙20〕 サンドよりフロベールへ

（ノアン）月曜日，夜（1866年10月1日）

親愛なる友

あなたの手紙がパリから戻ってきましたから欠けているものはありません。あなたの手紙をひどく大切に思っていますから，紛失させるわけにはいきません。洪水について話しておられませんので，セーヌ河はあなたの地方ではいたずらをせず，ユリノキは根っこを河に浸さずにすんだのだと思っています。厄介な事になるのを心配していましたし，堤防の高さがあなたを護るに十分かどうか見当がつきませんでした。こちらでは，その種の心配は全くありません。当地の川は大変危険ですが，私の家からは離れているのです。

あなたはこの世のものでない生涯についてそれほどまでに鮮明な思い出をお持ちで幸せですね。豊かな想像力と博学，これこそがあなたの記憶ですよ。けれども，たとえ鮮やかには何ひとつ思い出さないにしても，人は未来永劫での自分自身の再生の強烈な感情を持つものです。私には大層変った兄がいましたが，「自分が犬だったとき……」とよく言っておりました。兄はつい近頃，人間になったと信じていたのです。私の方は，植物か石だったと思います。自分が完全に生きていることを必ずしもいつも確信できません。そして時に，生きすぎたために大いなる疲労が蓄積しているような気がします。結

局のところ，私には分かりません，そしてあなたのように，「私は過去を所有している」と言うことはできないでしょう。それでは，人は再び現れるゆえに，死ぬことはないとあなたはお考えですか？　あなたがそのことをシックな人々に思い切っておっしゃるのであれば，あなたは勇気をお持ちです。結構ですね。この私にもその勇気があり，おかげで愚か者と思われる羽目におちています。でも，少しも構いません。私は他の多くの点で愚か者ですから！

ブルターニュについてお書きになったあなたの感想を読ませていただけるのは大変うれしいことです。私は語れるほど十分には何も見ていません。ただ全体的な印象を求めたのです。必要であった1，2の場面を再構成するのに役立ちました。あなたにそれも読んでお聞かせしましょう。でもまだ下書きの草稿です。あなたの旅行記はなぜ未発表のままにしてあるのですか？　あなたは反俗家なのですね，つまり，自分の書いたもの全てが必ずしも発表される価値があるとはお思いにならないのですね。それは間違いですよ。大家のペンになるものはことごとく教えです。下書きや草稿を見せることを恐れてはなりません。そうしたものさえ読者のはるか上にあります。読者の水準と同じものが非常に多く与えられていますから，哀れな読者はいつまでも下卑たままなのですよ。己れにも増しておばかさんたちを愛されなければなりません，彼らはまさしくこの世の不運ではないでしょうか？　粗野で，理想も持たず，退屈し，何も享受せず，何の役にも立たない人々ではないでしょうか？　彼らからこきおろされ，嘲弄され，過小評価されるにちがいありません，避けられないことですよ。けれども，彼らを見捨ててはなりません。そして，たとえ彼らが糞(メルド)…の方を好もうと否と，絶えず上等なパンを投げ与えてやらなければなりません。彼らは汚物に飽き飽きすれば，パンを食べましょう，でも，パンがなければ，永遠に糞(メルド)…を食べ続けることでしょう。

あなたが，「自分は10人か12人のためにのみ書く」とおっしゃるのを聞きました。雑談に花を咲かせてわれわれはさまざまなことを言いますが，それらはその時の印象の結果です。この言葉を言ったのはあなただけではありませんでした。それは月曜日* の意見，つまり，その日の主題でした。私は心の中で異議を唱えました。あなたは彼らのために書き，あなたを高く評価する12人はあなたと同等か，それ以上の価値を持っています。あなたは，あなたとなるために，他の11人を読むことを一度として必要としませんでした。従って，私たちは皆のために，手ほどきをされることを必要としている全ての者のために書くのです。理解されなければ，諦めて受け入れ，そしてもう一度やり直すのです。理解されれば，喜び，そして続けるのです。それがまさしく，私たちの辛抱強い仕事と芸術への愛の神髄ですよ。それを注ぎ込む心や精神のない芸術は一体何でしょう？　光を放たず，いかなるものにも生命を与えることのない太陽のようなもの。熟考なされば，あなたの見解ではありませんか？　あなたがそれを確信なされば，あなたが嫌悪感や倦怠を味わうことは決してありません。たとえ現在が不毛で，報いることがないにしても，読者へのあらゆる作用，影響を失うにしても，読者に最善を尽くして奉仕することで，頼みにする未来があり，勇気を持続し，自尊心が受けた傷を消し去ること

ができましょう。人生の中で数え切れぬほどしばしば，われわれの行う善がなんの役にも立たないように見え，実際，即時にはなんの役にも立ちません。それでもやはり，それは，熱意と善行の習わしを持続させます。この習わしがなければ全てが滅びてしまいましょう。

ぬかるみの中を苦労して歩いているのは89年以来のことでしょうか？　48年に到達するためにぬかるみを歩く必要がなかったでしょうか？　48年には一層ぬかるみを歩きました，でも，あるべき状態に到達するために。あなたはどんな風に理解しておられるのか話してください，そして私はあなたの意に適(かな)うよう，チェルゴを読み直しましょう。ドルバックまではお約束いたしません，駄馬にもいい面がありはしますが！

ブイエの戯曲の時期には私を呼んでください。私はここで，大いに仕事をしていることでしょうが，いつでも駆けつけることができます，それに心からあなたを愛していますよ。もはや女性でなくなった今，優しき神が公平でおありならば，私は男性になりますのに。体力があって，「さあ，カルタゴかどこかに出かけよう」と，あなたに言うでしょうに。けれども，実際は，男性でも女性でもなく，旺盛な活力もない子供への道をたどっているのです。人が再生するのはよそでです，ひどく違った場所でです。いったいどこで？　あなたよりも先に私はそれを知ることでしょう。できるものなら，あなたにそれをお伝えするために夢に現れましょう[28]。　（下線，引用者）

（＊〈マニー亭の夕食会〉は月曜日に開かれた。）

こうした言葉が雄弁に物語っているように，G. サンドは，スタンダールやフロベールの標榜する《少数の幸福な人々 the happy few》の主張の対蹠点に立つ。

—続—

表Ⅰ.

	ジョルジュ・サンドから	フロベールから	（総　数）
1863年	2通	2通	4通
1864年	1		1
1865年			
1866年	28	23	51
1867年	23	22	45
1868年	18	25	43
1869年	35	32	67
1870年	24	31	55
1871年	14＊	14	28
1872年	21	24	45
1873年	12	16	28
1874年	11	13	24
1875年	9	10	19
1876年	6	7	13
（総　数）	204	219	423

（＊1871年9月14日の手紙は，10月3日付の『ル・タン』紙（*Le Temps*）に「ある友への返事」（*Réponse à un ami*）として，発表されたため，アルフォンス・ジャコブは，公開書簡と見なし，その『ギュスターヴ・フロベール—ジョルジュ・サンド書簡集』（*Gustave Flaubert–Georges Sand Correspondence,* 1981）には収録していない。）

注

原則としてGeorge Sand の書簡は *Correspondance* (édition de Georges Lubin) (Classiques Garnier, 1964–1995), Gustave Flaubert の書簡は *Correspondance* (*Oeuvres complètes de Gustave Flaubert*, Club de l'Honnête Homme, 1975) から，引用。

(1)　〔Croisset〕, nuit de mercredi 〔5–6 décembre 1866〕.

Oh! que c'est beau, la lettre de Marengo Lirondelle! Sérieusement, je trouve cela un chef-d'œuvre! Pas un mot qui ne soit un mot de génie. J'ai ri tout haut à plusieurs reprises. Je vous remercie bien, chère maître, vous êtes gentille comme tout.

Vous ne me dites jamais ce que vous faites. Le drame, où en est-il?

Je ne suis pas du tout surpris que vous ne compreniez rien à mes angoisses littéraires! Je n'y comprends rien moi-même. Mais elles existent pourtant, et violentes. Je ne sais plus comment il faut s'y prendre pour écrire et j'arrive à exprimer la centième partie de mes idées, après des tâtonnements infinis. Pas primesautier, votre ami, non! pas du tout! Ainsi, voilà deux jours entiers que je tourne et retourne un paragraphe sans en venir à bout. J'en ai envie de pleurer dans des moments! Je dois vous faire pitié! Et à moi donc!

Quant à notre sujet de discussion (à propos de votre jeune homme), ce que vous m'écrivez dans votre dernière lettre est tellement ma manière de voir, que je l'ai non seulement mise en pratique, mais *prêchée*. Demandez à Théo. Entendons-nous, cependant. Les artistes (qui sont des prêtres) ne risquent rien d'être chastes, au contraire! Mais les bourgeois, à quoi bon? Il faut bien que certains soient dans l'humanité. Heureux même ceux qui n'en bougent!

Je ne crois pas (contrairement à vous) qu'il y ait rien à faire de bon avec le caractère de l'*artiste idéal*. Ce serait un monstre. L'Art n'est pas fait pour peindre les exceptions, et puis j'éprouve une répulsion invincible à mettre sur le papier quelque chose de mon cœur. Je trouve même qu'un romancier *n'a pas le droit d'exprimer son opinion* sur quoi que ce soit. Est-ce que le bon Dieu l'a jamais dite, son opinion? Voilà pourquoi j'ai pas mal de choses qui m'étouffent, que je voudrais cracher et que je ravale. A quoi bon les dire, en effet! Le premier venu est plus intéressant que M. G. Flaubert, parce qu'il est plus *général* et par conséquent plus typique.

Il y a des jours, néanmoins, où je me sens au-dessous du crétinisme. J'ai maintenant un bocal de poissons rouges et ça m'amuse. Ils me tiennent compagnie pendant que je dîne. Est-ce bête de s'intéresser à des choses si *melones*! Adieu, il est tard, j'ai la tête cuite.

Je vous embrasse 〔tendrement et suis votre〕

(tome 14, p. 315)

(2)　〔Paris, 7 (?) décembre 1866.〕

Ne rien mettre de son cœur dans ce qu'on écrit? je ne comprends pas du tout, oh mais, du tout. Moi il me semble qu'on ne peut pas y mettre autre chose. Est-ce qu'on peut séparer son esprit de son cœur, est-ce que c'est quelque chose de différent? est-ce que la sensation même peut se limiter, est-ce que l'être peut se scinder? Enfin ne pas se donner

tout entier dans son œuvre, me paraît aussi impossible que de pleurer avec autre chose que ses yeux et de penser avec autre chose que son cerveau. Qu'est-ce que vous avez voulu dire ? vous répondrez quand vous aurez le temps

(tome XX, p. 217)

(3) 《Flobert 〔*sic*〕 envoie à Madame son roman carthaginois》
《Madame est contente de ce livre.》
(cités par A. Jacob, *Gustave Flaubert-George Sand Correspondance*, p. 52)

(4) Dites-moi l'adresse exacte de Mme Sand pour que je lui réponde. Dans quel département est Nohant ? Son article est bien élogieux et je lui suis reconnaissant.
(citée par A. Jacob, ibid. p. 52)

(5) 〔Nohant, 28 janvier 1863.〕

Mon cher frère, il ne faut pas me savoir gré d'avoir rempli un devoir. Toutes les fois que la critique fera le sien, je me tairai parce que j'aime mieux produire que juger. Mais tout ce que j'avais lu sur *Salammbô* avant de lire *Salammbô* était injuste ou insuffisant. J'aurais regardé le silence comme une lâcheté, ou comme une paresse, ce qui se ressemble beaucoup. Il m'est indifférent d'avoir à ajouter vos adversaires aux miens. Un peu plus un peu moins…

J'ai à vous demander pardon d'une critique assez puérile à propos du *Défilé de la Hache*. Si je l'ai laissée c'est qu'une *réserve* ajoutait à la sincérité de mon admiration.

Nous nous connaissons bien peu. Venez donc me voir quand vous aurez le temps. Ce n'est pas loin, j'y suis toujours, mais je suis âgée, n'attendez pas que je sois en enfance.

Tirez-moi d'intrigue. J'ai reçu en 7bre une plante sèche intéressante dans une enveloppe anonyme. C'est votre écriture à ce qu'il me semble aujourd'hui. Mais c'est invraisemblable, d'où sauriez-vous que je m'occupe assez minutieu〔se〕ment de botanique ?

Ce que je garde, moi, de vos remerciements, c'est le ton de l'amitié et cela, je sais que je le mérite.

Tout à vous

G. Sand.

(tome XVII, pp. 406-407)

(6) 〔*Janvier 1863.*〕

Chère madame,

Je ne vous sais pas gré d'avoir rempli ce que vous appelez un devoir. La bonté de votre cœur m'a attendri et votre sympathie m'a rendu fier. Voilà tout.

Votre lettre, que je viens de recevoir, ajoute encore à votre article et le dépasse, et je ne sais que vous dire, si ce n'est que *je vous aime bien franchement*.

〔M. Aucante me demande pour vous un numéro de *L'Opinion nationale*. Vous le recevrez en même temps que ceci.〕

Ce n'est point moi qui vous ai envoyé, au mois de septembre, une petite fleur dans une

enveloppe. Mais ce qu'il y a d'étrange, c'est qu'à la même époque j'ai reçu de la même façon une feuille d'arbre.

Quant à votre invitation si cordiale, je ne vous réponds ni oui ni non, en vrai Normand. J'irai peut-être, un jour, vous surprendre, cet été. Car j'ai grande envie de vous voir et de causer avec vous.

〔Mille bonnes tendresses. Je vous baise les deux mains et suis tout à vous.〕

p.-s. Il me serait bien doux d'avoir votre portrait pour l'accrocher à la muraille dans mon cabinet, à la campagne, où je passe souvent de longs mois tout seul. La demande est-elle indiscrète ? Sinon, mille remerciements d'avance. Prenez ceux-là avec les autres que je réitère.

(tome 14. P. 153)

（7） 初日の様子を息子 Maurice とその妻 Lina に伝えた3月1日の手紙の一節。皇帝ナポレオンもはばからず涙を流したことが書き添えられている。

(…) Dans la salle, c'était des trépignements et des hurlements à chaque scène et à chaque instant, en dépit de la présence de toute la famille impériale. Au reste tous applaudissaient, l'empereur comme les autres et même il a pleuré ouvertement. La princesse Mathilde est venue au foyer me donner la main. J'étais dans la loge de l'administration avec le prince, la p〔rince〕sse, Ferri, M〔ada〕me d'Abrantès. Le prince claquait comme trente claqueurs, se jetait hors de la loge et criait à tue-tête. Flaubert était avec nous et pleurait comme une femme.(…)

(tome XVIII, p. 288)

（8） 〔Paris, 15 mars 1864.〕

Cher Flaubert, je ne sais pas si vous m'avez prêté ou donné le beau livre de Mr Taine. Dans le doute, je vous le renvoie, je n'ai eu le temps d'en lire ici qu'une partie, et à Nohant, je vais n'avoir que le temps de griffonner pour Buloz, mais, à mon retour, dans deux mois, je vous redemanderai ces excellents volumes d'une si haute et si noble portée. Je regrette de ne vous avoir pas dit adieu, mais comme je reviens bientôt, j'espère que vous ne m'aurez pas oubliée et que vous me ferez lire aussi quelque chose de vous. Vous avez été si bon et si sympathique pour moi à la 1re rep〔résentatio〕n de *Villemer*, que je n'admire plus seulement votre admirable talent, je vous aime de tout mon cœur.

Geroge Sand.

(tome XVIII, p. 323)

（9） 1er dîner chez Magny avec mes petits camarades. Ils m'ont accueillie on ne peut mieux. Ils ont été très brillants sauf le grand savant Berthelot qui seul a été je crois raisonnable. Gautier toujours éblouissant et paradoxal, St-Victor, charmant et distingué, Flaubert passionné et plus sympathique à moi que les autres, pourquoi, je ne sais pas encore. Les Goncourt trop d'aplomb surtout le jeune qui a beaucoup d'esprit, mais qui tient trop tête à ses grands oncles. Le plus fort en parole et en grand sens avec autant d'esprit que qui que ce soit est encore l'oncle Beuve comme on l'appelle là. (…)

On paie 10 frs par tête, le dîner est médiocre, on fume beaucoup, on parle en criant à tue-tête et chacun s'en va quand il veut. (…)

(recueilli dans *la Présence de Geroge Sand*, N°30, pp. 10-11)

(10) 〔Paris, mars-mai 1866〕

dimanche matin

C'est demain lundi jour de Magny, chère maître. J'y serai, bien entendu. D'ici là je vous embrasse.

Gve Flaubert.

(ed. A. Jacob, p. 60)

(11) 〔Palaiseau, 14 mai 1866.〕

(…)

Cher ami, je viens vous dire que je désire vous dédier le roman qui va paraître. Mais comme chacun là-dessus a *son idée* -comme dirait Goulard, —je veux savoir si vous m'autorisez à mettre simplement en tête de ma première page : à mon ami Gustave Flaubert. C'est une coutume que j'ai prise de mettre mes romans sous le patronage d'un nom aimé. J'ai dédié le dernier à Fromentin. (…)

J'ai fini mon roman, et vous ?

(tome XIX, pp. 877-878)

(12) 〔Paris〕, mardi matin 〔15 mai 1866〕.

Comment donc ! mais avec plaisir ! avec reconnaissance et attendrissement, chère maître !

Il me faut remettre le voyage de Palaiseau au mois d'août parce que je m'en retourne aux champs mardi prochain, ma pauvre vieille maman me réclame à grands cris. Je vous dirai donc adieu ou plutôt au-revoir lundi prochain.

J'ai lu *Monsieur Sylvestre* d'un seul coup et l'ai orné de notes marginales (selon ma coutume). Si j'ai le temps lundi j'apporterai mon exemplaire chez vous et nous en causerons avant d'aller chez Magny.

Vous avez bien raison de m'aimer, ce n'est que rendu.

Je vous serre les deux mains, vous baise sur les deux joues,

Et suis votre

(tome 14, p. 276)

(13) Palaiseau, merrcredi 16 〔mai 1866.〕

Eh bien, mon grand ami, puisque vous vous en allez, et que dans quinze jours, je vas m'en aller aussi en Berry, pour deux ou trois mois, faites donc un effort pour trouver le temps de venir demain jeudi. Vous dînerez avec cette chère et intéressante Marguerite Thuillier qui s'en va aussi. Venez donc voir mon ermitage et celui de *Sylvestre*. En partant de Paris, gare de Sceaux, à 1 heure, vous serez chez moi à 2 heures, ou, en partant à 5, vous serez à 6, et le soir vous pourrez repartir avec mes *cabots*, à 9 ou à 10.

Apportez l'exemplaire. Mettez-y toutes les critiques qui vous viennent. Ça me sera très bon. On devrait faire cela les uns pour les autres, comme nous faisions Balzac et moi. Ça ne fait pas qu'on se change l'un l'autre, au contraire, car en général on s'obstine davantage dans son *moi*. Mais, en s'obstinant dans son moi, on le complète, on l'explique mieux, on le développe tout à fait, et c'est pour cela que l'amitié est bonne, même en littérature, où la première condition d'une valeur quelconque est d'être soi.

Si vous ne pouvez pas venir, j'en aurai mille regrets, mais alors je compte bien sur vous lundi avant le dîner. (…)

Au revoir et merci pour la permission fraternelle de dédicace.

G. Sand.

(tome XIX, pp. 882-883)

(14) 〔Paris, 18 ou 19 mai 1866〕

Chère maître,

Ne m'attendez pas chez vous lundi. Ce jour-là je suis obligé d'aller à Versailles! Mais je me trouverai au Magny.

Mille bonnes tendresses de

votre

Gve Flaubert.

(ed. A. Jacob, p. 65)

(15) Paris, mercredi soir 〔22 août 1866.〕

Mon bon camarade et ami, je vas voir Alexandre à S〔ain〕t-Valéy samedi soir. J'y passerai dimanche et lundi. Je reviendrai mardi à Rouen et j'irai vous voir. Dites-moi comment on s'y prend. Je passerai la journée avec vous si vous voulez, je reviendrai coucher à Rouen si je vous gêne où vous êtes, et je repartirai mercredi matin ou soir pour Paris. Un mot de réponse tout de suite, par télégraphe si vous pensez que votre réponse ne m'arriverait pas par la poste avant samedi 4 h.

Je crois que je serai sur pied, car j'ai un rhume affreux. S'il empirait trop, je vous télégraphierais que je ne peux pas bouger, mais j'espère, je vas mieux déjà.

Je vous embrasse.

G. Sand.

(tome XX, p. 88)

(16) Croisset, près Rouen, vendredi 〔24 août 1866〕.

Chère maître,

〔Voici ce qu'il faut faire.

Dès que vous serez arrivée à Saint-Valery, vous retiendrez votre place dans la guimbarde qui va de Saint-Valery à Motteville. Autrement vous courez chance d'être retardée dans votre départ.〕

En partant de Saint-Valery à neuf heures moins le quart, vous arriverez à Rouen à une heure. Là, vous me trouverez à la portière de votre wagon, et vous n'aurez plus à vous

mêler de rien. Si vous ne partez pas de Saint-Valery le matin, vous n'avez plus que le départ du soir à quatre heures.

Vous avez dû recevoir un petit mot, par le télégraphe, pour vous dire que votre chambre vous attend. Donc, vous coucherez ici.

〔Soyez assez bonne pour m'envoyer de Saint-Valery une réponse m'annonçant l'heure exacte de votre arrivée. Je vous baise les deux mains et suis vôtre.〕

(tome 14, pp. 289-290)

(17) Saint-Valéry.

Lundi 1 h. du matin 〔26 au 27 août 1866.〕

Cher ami, je serai mardi à Rouen à 1 h., je m'arrangerai en conséquence. Laissez-moi voir Rouen que je ne connais pas, ou faites-le moi voir si vous avez le temps. Je vous embrasse. Dites à votre mère combien je suis touchée et reconnaissante du bon petit mot qu'elle m'a écrit.

G. Sand.

(tome XX, pp. 98-99)

(18) *Mardi 28*—Rouen

Chez Flaub 〔ert〕.

(…) Nous arrivons à Croisset à 3 h 1/2. La mère de Flaubert est une vieille charmante ; l'endroit est délicieux, la maison confortable et jolie et bien arrangée et un bon service, de la propreté, de l'eau, des *prévisions*, tout ce qu'on peut souhaiter. Je suis comme un coq en pâte.

Flaubert me lit ce soir une *Tentation de St-Antoine*, superbe. Nous bavardons dans son cabinet jusqu'à 2 h.

(cité per A. Jacob, op. cit., p. 71)

(19) Croisset, vendredi soir 〔31 août 1866〕.

(…)

Elle a été comme toujours très simple, et nullement bas-bleu.

(tome 14, p. 291)

(20) Paris, vendredi 〔31 août 1866〕

Embrassez d'abord pour moi votre bonne mère et votre charmante nièce. Je suis vraiment touchée du bon accueil que j'ai reçu dans votre milieu de chanoine, où un animal errant de mon espèce est une anomalie qu'on pouvait trouver gênante. Au lieu de ça, on m'a reçue comme si j'étais de la famille et j'ai vu que ce grand savoir-vivre venait du cœur. Ne m'oubliez pas auprès des très aimables amies. J'ai été vraiment très heureuse chez vous.

Et puis, toi, tu es un brave et bon garçon, tout grand homme que tu es, et je t'aime de tout mon cœur. J'ai la tête pleine de Rouen, de monuments, de maisons bizarres. Tout cela vu avec vous me frappe doublement. Mais votre maison, votre jardin, votre *citadelle*, c'est comme un rêve, et il me semble que j'y suis encore.

J'ai trouvé Paris tout petit hier, en traversant les ponts. J'ai envie de repartir. Je ne vous ai pas vus assez, vous et votre cadre. Mais il faut courir aux enfants, qui appellent et montrent les dents.

Je vous embrasse et je vous bénis tous.

G. Sand.

En rentrant chez moi hier, j'ai trouvé Couture à qui j'ai dit de votre part que mon portrait *de lui* était selon vous, le meilleur qu'on eût fait. Il n'a pas été peu flatté. Je vas chercher une trés bonne épreuve pour vous l'envoyer.

J'ai oublié de prendre trois feuilles du tulipier, il faut me les envoyer dans une lettre, c'est pour quelque chose de cabalistique.

(tome XX, pp. 102–103)

(21)

〔Croisset〕 samedi 11 heures

〔1er septembre 1866〕

Comme elle est gentille et bonne, votre lettre de ce matin, chère maître. Elle continue pour moi le regard d'adieu que vous m'avez donné avant-hier dans le wagon.

On ne fait que parler de vous depuis votre départ. Car vous avez extrêmement plu à tout le monde. C'est comme ça! on ne tient pas contre l'irrésistible et involontaire séduction de votre personne.

Il faudra revenir, hein? et pour plus de temps.

Vous avez oublié un châle de dentelles, qui voyagerait déjà sur le chemin de fer, sans la peur que vous ne soyez plus à Paris pour le recevoir, et qu'il se trouve égaré chez votre portier. Répondez-moi un petit mot et on vous l'expédiera tout de suite.

Merci d'avance pour le portrait.

Je vous embrasse tendrement et suis

votre

Gve Flaubert.

Pas n'est besoin de vous dire qu'on me charge de vous adreseer tout ce que je pourrai trouver de plus aimable.

(tome 14, pp. 291–292)

(22)

〔Paris〕 dimanche soir

〔2 septembre 1866〕

Renvoyez-moi le châle de dentelle. Mon fidèle portier me le renverra où je serai. Je ne sais pas encore. (…)

Vous m'écrivez une bonne chère lettre que j'embrasse. N'oubliez pas mes trois feuilles de tulipier.

On me demande à l'Odéon de faire jouer une pièce fantastique, *La Nuit de Noël* du théâtre de Nohant, je ne veux pas, c'est trop peu de chose. Mais puisqu'ils ont cette idée, pourquoi donc n'essaierait-on pas *votre féerie*? Voulez-vous que j'en parle? J'ai dans l'idée que ce serait le vrai théâtre pour une chose de ce genre. L'administration Chilly et Duquesnel veut faire du décor et des *trucs* en restant littéraiares. Nous parlerons de ça

ensemble quand je serai revenue ici. Vous avez le temps de m'écrire encore, je ne partirai pas avant trois jours.

G. Sand.

Tendresses chez vous.

J'oubliais! Lévy me promet de vous envoyer mon œuvre complète. C'est énorme. Vous fourrerez ça sur des rayons, dans un coin, et vous y puiserez quand le cœur vous en dira.

(tome XX, p. 112)

(23) Croisset, mercredi 〔12 septembre 1866〕

Chère maître,

J'ai reçu le paquet de livres. Ils sont maintenant rangés devant moi. Je vous remercie bien de ce cadeau. On vous admirait et vous aimait, vous voulez donc qu'on vous adore!

Où êtes-vous maintenant? Je suis seul, mon feu brûle, la pluie tombe à flots continuels, je travaille comme un homme, je pense à vous et je vous embrasse.

Gve Flaubert.

(tome 14, p. 293)

(24) Nohant, 21 septembre 〔18〕66

Je viens de courir pendant 12 jours avec mes enfants, et en arrivant chez nous je trouve vos deux lettres, ce qui, ajouté à la joie de retrouver Mlle Aurore fraîche et belle, me rend tout à fait heureuse.

Et toi, mon bénédictin, tu es tout seul, dans ta ravissante chartreuse, travaillant et ne sortant jamais? Ce que c'est que d'*avoir* trop sorti! Il faut à monsieur des Syrtes, des déserts, des lac asphaltite 〔*sic*〕, des dangers et des fatigues! Et cependant on fait des *Bovary* où tous les petits recoins de la vie sont étudiés et peints en grand maître. Quel drôle de corps qui fait aussi le combat du Sphinx et de la Chimère! Vous êtes un être très à part, très mystérieux, doux comme un mouton avec tout ça. J'ai eu de grandes envies de vous questionner, mais un trop grand respect de vous m'en a empêché 〔*sic*〕, car je ne sais jouer qu'avec mes propres désastres, et ceux qu'un grand esprit a dû subir pour être en état de produire, me paraissent choses sacrées qui ne se touchent pas brutalement ou légèrement. Sainte-Beuve, qui vous aime pourtant, prétend que vous êtes affreusement vicieux. Mais peut-être qu'il voit avec des yeux un peu salis, comme ce savant botaniste, qui prétend que la germandrée est d'un jaune *sale*. L'observation était si fausse que je n'ai pas pu m'empêcher d'écrire en marge de son livre: *C'est vous qui avez les yeux sales*. Moi je présume que l'homme d'intelligence peut avoir de grandes curiosités. Je ne les ai pas eues, faute de courage, j'ai mieux aimé laisser mon esprit incomplet. Ça me regarde et chacun est libre de s'embarquer sur un grand navire à toutes voiles ou sur une barque de pêcheur. L'artiste est un explorateur que rien ne doit arrêter et qui ne fait ni bien ni mal de marcher à droite ou à gauche, son but sanctifie tout. C'est à lui de savoir, après un peu d'expérience, quelles sont les conditions de santé de son âme. Moi je crois que la vôtre est en bon état

de grâce, puisque vous avez plaisir à travailler et à être seul malgré la pluie. Savez-vous que, pendant que le déluge est partout, nous avons eu, sauf quelques averses, du beau soleil en Bretagne ? Du vent à décorner les bœufs sur les plages de l'océan, mais que c'était beau, la grande houle, et comme la botanique des sables m'emortait, et que Maurice et sa femme ont la passion des coquillages, nous avons tout supporté gaîment. Pour le reste, c'est une fameuse balançoire que la Bretagne. Nous nous sommes pourtant indigérés de dolmens et de menhirs, et nous sommes tombés dans des fêtes où nous avons vu tous les costumes qu'on dit supprimés et que les vieux portent toujours. Eh bien, c'est laid, ces hommes du passé avec leurs culottes de toile, leurs longs cheveux, leurs vestes à poches sous les bras, leur air abruti, moitié pochard, moitié dévot. Et les débris celtiques, incontestablement curieux pour l'archéologue, ça n'a rien pour l'artiste, c'est mal encadré, mal composé, Carnac et Erdeven n'ont aucune physionomie. Bref la Bretagne n'aura pas mes os, (…). Il n'y a rein, là où règne le prêtre et où le vandalisme catholique a passé, rasant les monuments du vieux monde et semant les poux de l'avenir.

Vous dites *nous*, à propos de la *féerie*. Je ne sais pas avec qui vous l'avez faite, mais je me figure toujours que cela devrait aller à *l'Odéon actuel*. Si je la connaissais, je saurais bien faire pour vous ce qu'on ne sait jamais faire pour soi-même, monter la tête aux directeurs. Une chose de vous doit être trop originale pour être comprise par ce gros Dumaine. Ayez donc une copie chez vous et, le mois prochain, j'irai, de Paris, passer une journée avec vous, pour que vous me la lisiez. C'est si près de Palaiseau, le Croisset ! Et je suis dans une phase d'activité tranquille où j'aimerais bien à voir couler votre grand fleuve et à rêvasser dans votre verger, tranquille lui-même, tout en haut de la falaise.

Mais je bavarde et tu es en train de travailler. Il faut pardonner cette intempérance anormale à quelqu'un qui vient de voir des pierres, et qui n'a pas seulement aperçu une plume depuis 12 jours. Vous êtes ma première visite aux vivants, au sortir d'un ensevelissement complet de mon pauvre *moi*. Vivez ! Voilà mon *oremus* et ma bénédiction. Et je t'embrasse de tout mon cœur.

G. Sand.

(tome XX, pp. 125–127)

(25)

〔Croisset〕 samedi soir

〔22 septembre 1866〕

Moi《un être mystérieux》! chère maître, allons donc ! je me trouve au contraire d'une platitude écœurante, et je suis parfois bien ennuyé du bourgeois que j'ai sous la peau. Sainte-Beuve, entre nous, ne me connaît nulllement quoi qu'il dise.

Je vous jure même (par le sourire de votre petite-fille), que je sais peu d'hommes moins《vicieux》que moi. J'ai beaucoup *rêvé et* très peu exécuté. Ce qui trompe les observateurs superficiels c'est le désaccord qu'il y a entre mes sentiments et mes idées. Si vous voulez ma confession, je vous la ferai tout entière.

Le sens du grotesque m'a retenu sur la pente des désordres. Je maintiens que le cynisme confine à la chasteté. Nous en aurons à nous dire beaucoup (si le cœur vous en dit), la première fois que nous nous verrons.

Voici le programme que je vous propose. Ma maison va être encombrée et incommode pendant un mois. Mais vers la fin d'octobre, ou le commencement de novembre (après la pièce de Bouilhet), rien ne vous empêchera, j'espère, de revenir ici avec moi, non pour un jour comme vous dites, mais pour une semaine, au moins! Vous aurez votre chambre 《avec un guéridon et tout ce qu'il faut pour écrire》. Est-ce convenu? Nous ne serons que trois, ma mère comprise.

Quant à la féerie, merci de vos bons offres 〔*sic*〕 de service. Je vous *gueulerai* la chose (elle est faite en collaboration avec Bouilhet). Mais je la crois un tantinet *foible* et je suis partagé entre le désir de gagner quelques piastres et la honte d'exhiber une niaiserie?

Je vous trouve un peu sévère pour la Bretagne. Non pour les Bretons lesquels m'ont paru des animaux rébarbatifs, des porcs peu aimables. A propos d'archéologie celtique j'ai publié dans *L'Artiste* en 1858 une assez bonne blague sur les pierres branlantes. Mais je n'ai pas le numéro et ne me souviens même plus du mois.

J'ai lu, d'une traite, les 10 volumes de l'*Histoire de ma vie* dont je connaissais les deux tiers environ, mais par fragments. Ce qui m'a le plus frappé c'est la vie de couvent. J'ai sur tout cela quantité d'observations à vous soumettre qui me reviendront.

Quelle pluie, hein? Etes-vous pour longtemps à Nohant?

Que faut-il vous souhaiter? Moi je me souhaite de vous revoir. A bientôt donc. Je vous baise les deux mains, tendrement, et suis

votre

Gve Flaubert.

Ma mère et moi nous parlons de vous tous les jours. Elle sera très contente de vous r'avoir.

(tome 14, p. 294)

(26) Croisset, samedi soir
〔29 septembre 1866〕

Eh bien, je l'ai, cette belle, chère et illustre mine. Je vais lui faire faire un large cadre, et l'appendre à mon mur, pouvant dire, comme Mr de Talleyrand à Louis-Philippe: 《C'est le plus grand honneur qu'ait reçu ma maison》. Mauvais mot. Car nous valons mieux, que ces deux bonshommes.

Des deux portraits, celui que j'aime le mieux c'est le dessin de Couture. Quant à Marchal, il n'a vu en vous que 《la Bonne femme》. Mais moi qui suis *un vieux romantique*, je retrouve dans l'autre 《la tête de l'auteur》 qui m'a tant fait rêver dans ma jeunesse.

Vous êtes revenue à Paris, n'est-ce pas? Qu'y faites-vous? La piéce avance-t-elle? Pour votre ami il est maintenant étourdi par les marmots qui emplissent sa maison: un petit -neveu et une petite-nièce, lesquels crient comme des ânes et gambadent comme des singes. Je travaille avec tant de difficulté que j'ai besoin de beaucoup de silence et de recueillement.

Il est convenu, vous savez, que vous reviendrez ici vers la fin d'octobre. Nous serons seuls et nous aurons le temps de causer à fond et nous voir un peu.

Adieu chère maître, je vous embrasse bien tendrement et suis

votre

Gve Flaubert.
(éd., A. Jacob. p. 80)

(27)

Croisset, samedi soir
〔29 septembre 1866〕

L'envoi des deux portraits m'avait fait croire que vous étiez à Paris, chère maître. Et je vous ai écrit une lettre qui vous attend rue des Feuillantines.

Je n'ai pas retrouvé mon article sur les dolmens. Mais j'ai le *manuscrit* entier de mon voyage en Bretagne, parmi mes《œuvres inédites》. Nous en aurons à dégoiser, quand vous serez ici! Prenez courage!

Je n'éprouve pas comme vous ce sentiment d'une vie qui commence, la stupéfaction de l'existence fraîche éclose. Il me semble, au contraire, que j'ai toujours existé! Et je *possède* souvenirs qui remontent aux Pharaons. Je me vois à différents âges de l'histoire très nettement, excerçant 〔*sic*〕 des métiers différents et dans des fortunes multiples. Mon individu actuel est le résultat de mes individualités disparues. J'ai été batelier sur le Nil, *leno* à Rome du temps des guerres puniques, puis rhéteur grec dans Suburre, où jétais dévoré de punaises. Je suis mort, pendant les croisades, pour avoir trop mangé de raisins sur la plage de Syrie. J'ai été pirate et moine, saltimbanque et cocher, peut-être empereur d'Orient, aussi?

Bien des choses s'expliqueraient si nous pouvions connaître notre généalogie *véritable*. Car les éléments qui font un homme étant bornés, les mêmes combinaisons doivent se reproduire? Ainsi l'*Hérédité* est un principe juste qui a été mal appliqué. Il en est de ce mot-là comme de bien d'autres. Chacun le prend par un bout et on ne s'entend pas. Les sciences psychologiques resteront où elles gisent, c'est-à-dire dans les ténèbres et la folie, tant qu'elles n'auront pas *une nomenclature exacte* et qu'il sera permis d'employer la même expression pour signifier les idées les plus diverses. Quand on embrouille les catégories, adieu la Morale!

Ne trouvez-vous pas, *au fond*, que depuis 89 on bat la breloque? Au lieu de continuer par la grande route qui était large et belle comme une voie triomphale, on s'est enfui par les petits chemins, et on patauge dans les fondrières. Il serait peut-être sage de revenir momentanément à d'Holbach? Avant d'admirer Proudhon, si on connaissait Turgot?

Mais le CHIC, cette religion moderne, que deviendrait-elle? Opinions-chic (ou chiques): être *pour* le catholicisme (sans en croire un mot), être pour l'esclavage, être pour la maison d'Autriche, porter le deuil de la reine Amélie, admirer *Orphée aux enfers*, s'occuper de Comices agricoles, parler sport, se montrer froid, être Idiot, jusqu'à regretter les traités de 1815, cela, est tout ce qu'il y a de plus neuf.

Ah! vous croyez, parce que je passe ma vie à tâcher de faire des phrases harmonieuses en évitant les assonances, que je n'ai pas, moi aussi, mes petits jugements sur les choses de ce monde. Hélas oui! et 〈je〉 même je crèverai enragé de ne pas les dire.

Mais assez bavardé. Je vous ennuierais à la fin.

La pièce de Bouilhet passera dans les premiers jours de novembre. C'est donc dans un mois que nous nous verrons.

Remerciez pour moi vos enfants des choses aimables que vous m'envoyez de leur part. Je vous embrasse très fort, chère maître, et suis

votre

Gve Flaubert.

(tome 14, pp. 296-297)

(28) [Nohant] lundi soir

[1er octobre 1866]

Cher ami,

Votre lettre m'est revenue de Paris. Il ne m'en manque pas. J'y tiens trop pour en laisser perdre. Vous ne me parlez pas inondations. Je pense donc que la Seine n'a pas fait de bêtises chez vous et que le tulipier n'y a pas trempé ses racines. Je craignais pour vous quelque ennui, et je me demandais si votre levée était assez haute pour vous protéger. Ici, nous n'avons rien à redouter en ce genre. Nos ruisseaux sont très méchants, mais nous en sommes loin.

Vous êtes heureux d'avoir des souvenirs si nets des autres existences. Beaucoup d'imagination et d'érudition, voilà votre mémoire. Mais, si on ne se rappelle rien de distinct, on a un sentiment très vif de son propre renouvellement dans l'éternité. J'avais un frère très drôle, qui souvent disait: Du temps que j'étais chien... Il croyait être homme très récemment. Moi je crois que j'étais végétal ou pierre. Je ne suis pas toujours bien sûre d'exister complètement, et d'autres fois je crois sentir une grande fatigue accumulée pour avoir trop existé. Enfin je ne sais pas, et je ne pourrais pas, comme vous, dire: Je possède le passé. Mais, alors, vous croyez qu'on ne meurt pas, puisqu'on *redevient*? Si vous osez le dire *aux chiqueurs,* vous avez du courage, et c'est bien. Moi j'ai ce courage-là, ce qui me fait passer pour imbécile, mais je n'y risque rien: je suis imbécile sous tant d'autres rapports!

Je serai enchantée d'avoir votre impression écrite sur la Bretagne. Moi je n'ai rien vu assez pour en parler. Mais je cherchais une impression générale et ça m'a servi pour reconstuire un ou deux tableaux dont j'avais besoin. Je vous lirai ça aussi, mais c'est encore un gâchis informe. Pourquoi votre voyage est-il resté inédit? Vous êtes *coquet;* vous ne trouvez pas tout ce que vous faites digne d'être montré. C'est un tort. Tout ce qui est d'un maître est enseignement, et il ne faut pas craindre de montrer ses croquis et ses ébauches. C'est encore très au-dessus du lecteur, et on lui donne tant de choses à son niveau que le pauvre diable reste vulgaire. Il faut aimer les bêtes plus que soi, ne sont-elles pas les vraies infortunes de ce monde? Ne sont-ce pas les gens sans goût et sans idéal qui s'ennuient, ne jouissent de rien et ne servent à rien? Il faut se laisser abîmer, railler et méconnaître par eux, c'est inévitable. Mais il ne faut pas les abandonner, et toujours il faut leur jeter du bon pain, qu'ils préfèrent ou non la m. Quand ils seront saouls d'ordures ils mangeront le pain, mais s'il n'y en a pas, ils mangeront la m. *in secula seculorum.*

Je vous ai entendu dire: Je n'écris que pour 10 ou 12 personnes. On dit, en causant, bien des choses qui sont le résultat de l'impression du moment. Mais vous n'étiez pas seul à le dire. C'était l'opinion du *lundi,* ou la thèse de ce jour-là. J'ai protesté intérieurement. Les douze personnes pour lesquelles on écrit et qui vous apprécient, vous valent ou vous

surpasent. Vous n'avez jamais eu, vous, aucun besoin de lire les onze autres pour être vous. Donc on écrit pour tout le monde, pour tout ce qui a besoin d'être initié. Quand on n'est pas compris, on se résigne et on recommence. Quand on l'est, on se réjouit et on continue. Là est tout le secret de nos travaux persévérants et de notre amour de l'art. Qu'est-ce que c'est que l'art sans les cœurs et les esprits où on le verse ? Un soleil qui ne projetterait pas de rayons et ne donnerait la vie à rien. En y réfléchissant, n'est-ce pas votre avis ? Si vous êtes convaincu de cela, vous ne connaîtrez jamais le dégoût et la lassitude. Et si le présent est stérile et ingrat, si on perd toute action, tout crédit sur le public, en le servant de son mieux, reste le recours à l'avenir, qui soutient le courage et efface toute blessure d'amour-propre. Cent fois dans la vie, le bien que l'on fait ne paraît servir à rien, et ne sert à rien d'immédiat, mais cela entretient quand même la tradition du bien vouloir et du bien faire sans laquelle tout périrait.

Est-ce depuis 89 qu'on patauge ? Ne fallait-il pas patauger pour arriver à 48, où l'on a pataugé plus encore, mais pour arriver à ce qui doit être ? Vous me direz comment vous l'entendez, et je relirai Turgot pour vous plaire. Je ne promets pas d'aller jusqu'à d'Holbach, bien qu' *il ait du bon, la rosse.*

Vous m'appellerez à l'époque de la pièce de Bouilhet. Je serai ici, piochant beaucoup, mais prête à courir et vous aimant de tout mon cœur. A présent que je ne suis plus une femme, si le bon Dieu était juste, je deviendrais un homme. J'aurais la force physique et je vous dirais : allons donc faire un tour à Carthage ou ailleurs. Mais voilà, on marche à l'enfance, qui n'a ni sexe ni énergie, et c'est ailleurs, bien ailleurs qu'on se renouvelle. *Où* ? Je saurai ça avant vous et si je peux, je reviendrai vous le dire en songe.

(tome XX, pp. 135-138)